

歴史は未来の羅針盤



日野町史『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」を平成一七年二月に刊行しました。第五巻「文化財編」は平成一九年二月に刊行予定です。このコーナーでは、町史の内容や調査報告などを紹介していきます。皆さんに町史に親しんでいただき、実際に手に取ってご覧いただきたいと思います。

古代の近江には、多くの朝鮮半島の人々が渡来人として移住してきました。渡来人の移住により、優れた学問や、先進的な製薬・土木・灌漑などの技術が日本に持ち込まれました。

今回は、『近江日野の歴史』第一巻の古代編「第二章 蒲生の古代」から、日野に見られる渡来人との関わりをご紹介します。

遷都の候補地

匱辻野と必佐

『日本書紀』には、「ときに、天皇、蒲生郡の匱辻野に幸して、宮地を觀はす。」とあり、天智天皇九（六七〇）年に、天智天皇が匱辻野を見学した記録が見られます。この匱辻野見学は遷都候補地の下見と考えられています。

当時の日本では、朝鮮半島における新羅・高句麗の国家間の紛争により、新羅及び新羅と友好関係にあった唐に対する防備が急務と

されてきました。また、日本と親密な関係にあった高句麗との提携を一層強める目的もあったことから、大津宮からの遷都が計画されていたようです。そのため、遷都の候補地は、攻め込まれにくい内陸部にあり、かつ人や物資が行き交いやすい場所とされたことが推測されます。匱辻野はその要件を満たした立地で、次の都の候補地のひとつとして挙げられていたようです。

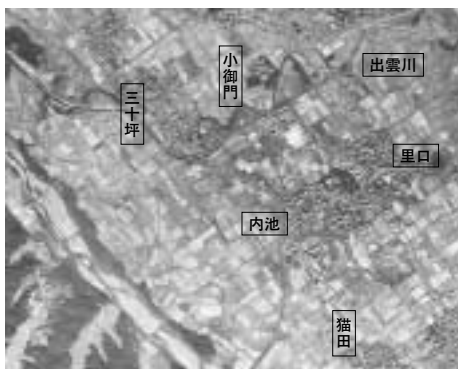
必佐地区を含む一帯と考えられ、日野町域の一部が都の候補地となることが分かります。また、『日本書紀』によると、その前年、天智天皇八（六六九）年には、鬼室集斯ら百済の人々七百人余りが、蒲生郡に移住してきたとされています。この移住は、天智天皇による遷都計画の布石であった可能性が指摘されています。しかし、この匱辻野への遷都計画は天智天皇の死によって、幻となってしまったようです。

渡来人のあしあと

蒲生郡には渡来人に関わる遺跡がいくつか残っています。東近江市には、渡来人との深い関わりを示す石塔寺の三重石塔があります。また、東近江市の天狗前古墳群や竜王町の三ツ山古墳群があります。この二つの古墳群からは、渡来系氏族に関わる階段式の横穴式石室が出土されています。そして、蒲

生郡には、天智天皇八年に百済人が移住する以前から、安吉勝氏や大友日佐氏など、多数の渡来系氏族が居住していたことが木簡などから知られています。

これらのことから、蒲生郡が濃密な渡来人の居住地であったことがわかります。当時、蒲生郡に含まれていた日野町にも渡来人が居住していた可能性が指摘されています。その可能性をうかがわせるもののひとつが、大字寺尻にある野田道遺跡です。そこからは、朝鮮半島で使われる暖房装置であるオンドルに類した遺構をもった竪穴住居跡が発見されています。また、大字小野にある鬼室神社には、蒲生郡に移住したとされる鬼室集斯の名が記された墓碑が残っています。



▲必佐地区周辺の航空写真



▲鬼室神社（小野）